

手と手と手

岡山発 国際貢献

「仕事をもらえませんか。何でもしますから」。突然、聞こえた日本語に国際医療ボランティアAMDA(本部・岡山市榴津)の現地事業統括金山夏子(三九)は驚いた。

昨年二月中旬、AMDAが緊急救援活動拠点としていたインドネシア・バンタアチェ(スマトラ島)のザイナルアブディン病院。津波で家と仕事を失ったアブ・シャマー(二八)の妻の入院先でもあった。二年間、日本で鉄鋼技術を学んだアブ。仕事欲しさも手伝って、日本人を見つけると、思わず話しかけていた。

バンタアチェで日本語が話せる現地人はほとんどいない。けっこう堪能な彼は早速、通訳に採用された。地域内に人脈もあり、被災者からの情報収集など、日を重ねるごと

現地スタッフ

に信頼を得て、他の仕事も任せられるようになった。今では、現地スタッフのリーダーだ。

イニシアチブ

壊滅的打撃を受けたバンタアチェ。復興支援は人手を伴う。AMDAの現地スタッフは、九十人を超える。ほとんどが学生などボランティアだが、八十七人までは現地の人だ。「ローカルイニシアチブ」。

それを尊重しての陣容だ。援助される側にもプライドがあるから、地元の意見を聞き、援助の仕方、内容を吟味し、現地主導で行うというAMDAの基本精神、特徴にもなっている。

ムハマド・ダハラン(三三)も、元からアチェに暮らす一人。緊急救援に来ていた日本の医療法人で通訳として働いた。契約が切れた後、アブの紹介でAMDAへ。今は子どもも対

象の支援事業で現場リーダーを務めている。日本企業で三年間仕事し、貯めたお金で始めた雑貨店は津波で消えた。婚約者も失った。

ほとんどのスタッフが被災者だ。心に傷を負った人が、似通ったつらい境遇の人の再起を助けるため頑張っている。今、子どもたちを楽しませよう



ダハラン(中央)は、子どもの支援プロジェクトでリーダー。AMDAの現地スタッフの大半は被災者だ＝インドネシアのアチェ州

と、歌や劇などの情操プログラムに懸命だ。

相談役

バンタアチェは、訪ねた十一月下旬を迎えても、日中は三五度前後の酷暑。慣れているとはいえ、体力の消耗は避けられないが、昼間の仕事を終え、避難キャンプに戻ったアブには、住民の相談に乗るといふ役割が待っている。

「新しいテントはどこで手に入るか」「必要な物があるのに、買うことができない。何とかならないか」「キャンプの避難民のために、食用の牛を調達してほしい」。対応に追われ、寝るのは毎日午前零時ごろだ。

「明日は休む」と言っていたアブが翌日も事務所に顔を出していた。「やらないければならないことがいっぱい。それに、キャンプのテント生活は暑すぎるからね」。冗談も交えながら、笑う。

「今の仕事はどう?」と聞くと、こんな答えが返ってきた。「自分のアイデアが現地の仲間のために役に立つ。素晴らしいと思わない?」

バンタアチェの病院に島外から派遣されているAMDAのインドネシア人麻酔科医ハリス(三九)は、資金や機器の不足を嘆きながら言った。「一番不足しているのは、現地の人材。育成が急務だ。私たちはいずれ去らなければならないのだから」

金山は言う。「復興支援プロジェクトが終了する八月以降は、現地スタッフが引き継げる形にしたい」

いつかは自分たちの手で立ち上がる。キーワードは自立。それを、アブらが背負う。(敬称略)

キーワードは「自立」